令和四年七月

漢詩鑑賞

**野　塘**

**侵曉乘涼偶獨來　　をし　にじて　りる**

**不因魚躍見萍開　　のるにらざるにのくをる**

**卷荷忽被微風觸　　　ちにれられ**

**瀉下淸香露一杯　　す　の**

【通釈】起句　早朝ようやく空の明けそめる頃、涼しさにひかれて何と

なく独りで野原の中の池のほとりにやって来た。

　　　　承句　魚が跳ねたのでもないのに、水面の浮き草が風に吹き寄

せられ間をあけて動いている。

　　　　転句　はすの巻いた葉が突然そよ風に吹かれて、

　　　　結句　葉の上にたくわえていた清らかな香りの朝露を注ぎ落と

してしまった。

【語釈】　野塘　　野原の中の池。塘はつつみ、又池をいう。

　　　　　侵曉　　明け方。まだ十分に明け放たれぬうちをいう。

　　　　　乘涼　　納涼する。

　　　　　萍　　　浮き草。

　　　　　卷荷　　巻いている蓮の葉。捲荷ともいう。

　　　　　瀉下　　そそぎ下る。

【押韻】　平声、灰韻。來、開、杯。

【解説】　韓偓（八四四－九二三）は､唐王朝末期の人。昭宗の龍紀元年（八八九）進士及第。昭宗の信任厚く、累進し中書舎人、兵部侍郎となったが、権力者朱全忠に從わなかった為に疎まれ、地方に左遷された。その後朱全忠が昭宗を殺し次いで擁立した哀帝の天祐二年（九〇五）中央に招かれたが応じなかった。その二年後天祐四年（九〇七）朱全忠は哀帝に強要して禅譲を受け即位。梁太祖と称し、ここに唐王朝は滅亡した。

　　　　　この詩は、夏の早朝の爽やかな野塘の風景を動的にあたかも眼前に見えるように美しく詠じた叙景詩の佳作と言える。

　　　　　一方、この詩は暗喩の詩であるとして隠にこめられた詩意を読もうとする見方がある。即ち起句は自分が朝廷に地位を得たこと、承句は左遷されたこと、転句は讒言にあったこと、結句は皇帝の恩沢が失われたことをいうとする見方である。

　　　　　作者の経歴に鑑みれば、いずれの説も捨て難く併せて鑑賞したい末唐の一品です。

以上